

ちびっ子わせだの森の実践報告

—ちびっ子わせだの森の捉え方の変容—

内畑 愛美

1. はじめに

早稲田大学大学院日本語教育研究科（以下、日研）の最大の特徴は、大学院で学びながら実践をすることが出来ることである。日研に入学すると、修了するまでに日本語教育実践研究という科目群から最低 3 つの講義の単位を取得する必要がある。筆者は数ある、日本語教育実践研究の講義の中でも、「日本語教育実践研究(1)」は特殊な講義だと考えている。なぜなら、「日本語教育実践研究(1)」の「にほんご わせだの森」（以下、「わせだの森」）は他の日本語教育実践研究の講義のようにクラスや実践の場が最初から準備されている訳ではないからである。

「わせだの森」の指導教員である池上は、「わせだの森」は「地域」と「日本語教育」をめぐって、院生が自ら考え自ら実践を組み立てていくことを課題（池上 2009）とする実践の場であると述べている。つまり、「わせだの森」という場は、企画、運営、広報まで、実習生が納得のいくまで対話をし、共に作り上げていく場なのである。日本語教育実践の講義はどれも、実習生の言語教育観や個性が色濃く出る場である。「わせだの森」は、以前筆者が受講していた「日本語教育実践研究(3)」の年少者日本語教育実践（以下、「年少実践」）では、実践の場は、1対1の形式であった。年少実践に比べ、「わせだの森」は、実習生が協働で1つの場を作り上げるので、実習生の言語教育観や個性が色濃く出る場であると感じた。筆者は、年少者日本語教育の専門性をもった者として、「わせだの森」にアプローチしたいと考えた。そのため、子どものための「わせだの森」、「ちびっ子わせだの森」（以下、「ちび森」）の実践を行うこととした。2012年度春学期（以下、12春）のコンセプトは「つながりをつくる」であったので、「ちび森」もそのコンセプトをもとに、筆者はメインファシリテーターとして各活動をデザインした。

本稿では、筆者が「ちび森」を作ろうとしたきっかけ、また、「ちび森」の準備段階、実践概要、実践例、実践後の考察について時間軸に沿って記述する。その上で、我々実習生は「活動全体に共通する理念として、(中略)「つながりをつくる」ことを掲げた」（松本・角浜 2012）ことがどのように「ちび森」に影響を与え、さらに筆者の「ちび森」の捉え方が変容していったのかについて報告する。

2. なぜ「わせだの森」の中にちびっ子の森を作ったのか

2.1. 11 秋森での経験

筆者が「わせだの森」に実習生として、関わりたいと考えたのは、子どもたちのための活動を「わせだの森」に入れたかったからである。そのきっかけとなったのは、先学期(2011年秋学期)に、「わせだの森」に、日研ボランティアとして、参加したことである。ボランティアとして参加した際、「わせだの森」に来ていた子どもたちは教室の端の方にある子どもコーナーで、本を読んだり、お絵かきをしたりしていた。その姿を見て、子どももせっかく来てくれているのだから、何か子どもたちのための活動を準備することが出来たら良いのではないかと考えた。せっかくだから、子どもたちのことばの力を「わせだの森」で育成したらよいのではと考えたのだ。また、子どもたちが飽きてしまった時に、子どもたちを連れてきた親の方へ行ってしまうのも何とかしなくてはと思った。なぜなら、「わせだの森」に日本語を使用する機会を求めてきた親が、活動に集中することが出来ないというのはもったいないと思ったからである。しかし、子どもが親にいろいろ伝えたいと思うのは、自然なことである。そこで、筆者は、親も子どもと一緒に学べる活動もあってはいいのではないかと考えた。しかし、そのような活動を「わせだの森」の中に取り入れることは容易ではない。そこで、「わせだの森」を受講し、自分自身でそのような「わせだの森」の活動を実践しようと考えた。詳しくは、3.1で報告する。

2.2. 年少実践での経験

秋森での経験から筆者が考えたことは、同時期に受講していた「年少実践」と日研の理論科目である年少者日本語教育研究(以下、「年少理論」)も深く関係している。筆者は、「年少実践」と「年少理論」を通して、「ことばの力の捉え方が言語教育の在り方を決定する」(川上 2011)ことを学び、自身の「ことばの力の捉え方」についてこの時期、非常に考えた。そこで筆者の考えていた「ことばの力の捉え方」は「自分のことを語れる力」である。この定義を筆者は、年少理論のレポートの中で以下のように述べている。

この私の「語れる」とは、自分から発信するという意味も、他者の意見を聞き、それに対して話すという活動を行うという意味も含まれており、双方向的なことばのコミュニケーションの力を示している。自分のことを語る力がある、また他者と、語るという活動を行うことによって、他者と相互作用的な関係を築くことが出来るということが、私の考えることばの力である。この他者には家族、友人など、様々な他者が含まれる。このことばの力には、日本語のみではなく、様々な言語が含まれている。

(年少者日本語教育研究 レポート C 私の考えることばの力と実践、そして私の研究より
一部抜粋)

筆者の「ことばの力の捉え方」は、他者との関わりを重視しており、その関わりのなかで、子どもたちのことばの力はのぼすことが出来るのか考えていたのである。もちろん、11 秋森の子ども用のコーナーでやっていた本を読んだり、お絵かきをしたりすることが、子どもたちのことばの力をのぼすことにつながっていないとは考えていない。そこに、ことばの学びはある。しかし、筆者の考えていた「ことばの力の捉え方」から、「わせだの森」の子どもたちの活動のデザインをすると、どのようになるのだろうかと思うきっかけに、「年少実践」と「年少理論」の経験はなったのである。

3. 実践概要

本節では、「ちび森」での実践の概要を準備段階と実施段階とで分け、報告する。なお、詳細な実践内容に関しては、「4.実践内容」で報告することとする。

3.1. 準備段階での「ちび森」

準備段階で筆者はどのように、「ちび森」の活動を考えていたのか。2012年4月30日提出「わせだの森 デザイン案」から分析する。
個人テーマとして筆者は以下のように述べている。

「ちびっ子わせだの森—親と子が楽しくことばを学べる森—」

※親子ではなく、親と子としたのは、個別でも出来る活動を考えたいからです。

※ことばとしたのは、日本語だけでなく、それ以外の言語を使用しても良いという意味合いです。

(2012年4月30日提出 「わせだの森 デザイン案」より一部抜粋)

この個人テーマには、2.1、2.2で述べたことが、筆者の「ちび森」のデザインに影響を与えていることが読みとれる。さらに、筆者は「ちび森」の目標として、以下のように述べている。

- ・親と子がことばを使ってともに学ぶ場を提供する。
- ・親同士の交流、子ども同士の交流の場を提供する。
- ・日本語(ことば)を使って自分のことを発信できる活動をデザインする。
- ・「日本語を使って何かをする=楽しい」という気持ちになるような活動をデザインする。

(2012年4月30日提出 「わせだの森 デザイン案」より一部抜粋)

この目標は、「ちび森」の各活動をデザインするうえで、筆者の中心となる考えとなった。「わせだの森」の活動を続けていくうちに、「交流」ということばは、筆者の中で「つながり」ということばに変わっていった。「ちび森」の対象者は、「わせだの森」に来てくれた子ども、親、子どもが好きな人、活動に参加したい人を想定していた。

「ちび森」の活動の流れに関しても、以下のように述べている。

活動の流れ

※ことばを使った活動→読み聞かせ、紙芝居などという流れで行いたいと思います。

➤ 15:00～15:50 ことばを使った活動(50分間)

◆ことばを使った活動例

- ・自己紹介マップ作成(始めて来てくれた時など)
- ・自分ち史作成(親子参加が多い場合)
- ・ことばパズル(ことばで遊ぶ)
- ・クイズ作成(自分でことばを組み合わせて考える)

※これらの活動の成果物は模造紙に貼り、ちびっ子わせだの森エリアに掲示していきたいと思います。

狙いとしては、自分の書いたもの、作ったものを誰かに見せたりして、発信していくということを体験してもらうということです。

➤ 15:50～16:00 休憩(10分間)

(中略)

➤ 16:00～16:30 読み聞かせ、紙芝居

◆読み聞かせ、紙芝居具体的な内容

※・5月なら子どもの日の話、6月なら梅雨、7月なら夏の話など、季節にあった話を準備します。

- ・その日来てくれた子ども年齢に合わせて読んであげられるように、幼児、小学校低学年、小学校中学年、小学校高学年ぐらゐの本を準備したいです。
- ・その日来てくれた子どもの興味に合わせて読んであげられるように、クイズ、動物、車などの本を用意しようと思います。

(2012年4月30日提出 「わせだの森 デザイン案」より一部抜粋)

以上のように筆者は「ちび森」の活動に対して、考えていた。しかし、「ちび森」での活動を行っていくうちに、これらのことは変容していった。

3.2. 実施段階の「ちび森」

「わせだの森」は、水曜日と土曜日の隔週で行われていた。しかし、「ちび森」は、「ちび森」の活動は、5月19日(土)、6月2日(土)、6月16日(土)、6月30日(土)、7月14日(土)の計5回、土曜日のみ行った。土曜日のみにした理由はいくつかある。1点目は、土曜日は学校が休みだからである。学校が休みの日の方が、子どもたちも親たちも参加しやすいだろうと考えたからである。2点目は、水曜日の「わせだの森」の開催時間の遅さである。水曜日の「わせだの森」は夜遅く、次の日も学校があつたり、仕事があつたりするだろうと考えたためである。

「ちび森」は土曜日に活動していたため、筆者の中には、「せっかくの休日を使って参加してくれているのだから、まずは、来て良かったと思ってもらいたい。楽しんでもらいたい。」という気持ちが強く、そこから2.2で述べたことばの学びも生まれていけばと考えていた。

前述したように、今期の「わせだの森」のコンセプトは「つながり」であった。「日本語」を学んでもらうのではなく、「日本語」を通して、他者と「つながり」、何か学びを得てもらおうとするものである。そのため、参加者も日本語学習者と範囲は狭めず、広く募集した。その結果、様々な人々が「わせだの森」に来てくれた。「ちび森」も例外ではなく、外国にルーツを持つ子どもたちと、日本人の子どもたちが半々となった。年齢は、3歳から小学校4年生までであった。子どもたちの詳細は、表1を参照。なお、名前は個人情報関係でアルファベットを用いている。

表1 「ちび森」参加者詳細

名前	性別	年齢	父	母	備考欄
A	女	5歳	アイルランド	日本	・Bとは兄弟関係 ・B、D、E、Fと同じ近隣の保育園に通っている
B	男	3歳	アイルランド	日本	・Aとは兄弟関係 ・A、D、E、Fと同じ近隣の保育園に通っている
C	男	3歳	アイルランド	日本	・両親がAとBの両親と知り合い
D	男	4歳	日本	日本	・A、B、E、Fと同じ近隣の保育園に通っている
E	男	4歳	日本	日本	・A、B、D、Fと同じ近隣の保育園に通っている
F	男	4歳	日本	日本	・A、B、D、Eと同じ近隣の保育園に通っている

G	男	10歳 (小4)	韓国	韓国	・Hとは兄弟関係 ・朝鮮学校に通っている
H	女	8歳 (小2)	韓国	韓国	・Gとは兄弟関係 ・朝鮮学校に通っている
I	女	? (小1)	タイ	日本	・母親の進学に伴い来日

「ちび森」の活動は全5回行った。全5回の内、そのうち、「ちび森」単独の活動がデザインされたのは、4回である。毎回の活動は、筆者が活動案を作成し、他の実習生がその活動案にコメントをするという形式で毎回行っていた。なお、筆者がメインファシリテーターとして、活動を担当したのは、3回目までである。2回目と3回目は、日研生がボランティアとして、2名活動をサポートしてくれた。活動のとき、子どもたちの理解を助けすることや、母語でのサポートなど、様々な場面で助けられた。4回目は別の実習生が担当した。5回目は、メインの活動と全て合同の活動となった。5回目のテーマは「アウトドア」であった。メインの活動は「私の『気持ちのいい場所』」で、教室の外に出て行うものだった。この活動は、年齢関係なく参加することが出来るため、「ちび森」単独の活動ではなく、合同という形式を取った。しかし、一人の女の子は、参加者たちが外に行っている際に、Iちゃんは部屋でクイズを作成していた。そして、参加者が教室に戻ってきたあとに、Iちゃんを中心となって、子どもたちを巻き込み、参加者にクイズを出していた。クイズに正解するとIちゃんが書いた絵がもらえるというものである。

「わせだの森」の全体像は、表2、全5回の「ちび森」の概要は、表3の通りである。「ちび森」は、1回目の活動以外はメインの活動と関連性のある活動を行った。

表2 「にほんご わせだの森」2012年春の森 全体像

活動日時	場所	内容	参加人数
①2012/05/19 15:00~16:30	22号館502教室	映画クイズ 映画①映画について話そう!	42名
②2012/05/23 18:15~19:45	22号館502教室 室・22号館内	猛獣狩り アウトドア①22号館クイズ大会	15名
③2012/06/02 15:00~16:30	22号館717教室 室・718教室	バースデーチェーン アクティビティ①他人の夢になりきって話す	33名
④2012/06/06 18:15~19:45	22号館502教室 室	映画クイズ 映画②映画について話そう!	17名
⑤2012/06/16 15:00~16:30	22号館502教室 室・501教室	部屋の四隅 本①本に関わる私の話(思い出)を話す	20名

⑥2012/06/20 18:15~19:45	22号館 502 教 室	休日の過ごし方 アクティビティ②他人の夢になりきって話す	12名
⑦2012/06/30 15:00~16:30	22号館 502 教 室・501 教室	インターネットクイズ インターネット①Web サイトを紹介する	18名
⑧2012/07/04 18:15~19:45	22号館 502 教 室	絵の伝言ゲーム 本②「森の『人生図鑑』」を作る	31名
⑨2012/07/14 15:00~16:30	22号館 502 教 室・大学構内	ジェスチャーゲーム アウトドア②私の「気持ちのいい場所」探し	24名
⑩2012/07/18 18:15~19:45	22号館 502 教 室	インターネットクイズ インターネット②スピード・トーキング	19名

(松本・角浜 2012 より引用 一部筆者が編集)

網掛けになっている部分が「ちび森」で関連性を特に持たせた活動である。どのように関連性を持たせたかに関しては、4. 実践内容で詳しく報告する。

表3 2012年春の森「ちびっ子わせだの森」概要

活動日時	場所	内容	参加人数
①2012/05/19 15:00~16:30	22号館 502 教 室/後ろ部分	わたし MAP を作ろう！ 紙芝居	5名
②2012/06/02 15:00~16:30	22号館 718 教 室	じぶんの夢を書こう！ 紙芝居	7名
③2012/06/16 15:00~16:30	22号館 501 教 室	紙芝居を作ろう！	2名
④2012/06/30 15:00~16:30	22号館 501 教 室	空気砲 お絵かき	2名
⑤2012/07/14 15:00~16:30	22号館 502 教 室・大学構内	ジェスチャーゲーム アウトドア②私の「気持ちのいい場所」探し (クイズ作成)	4名

表を見ても分かるように、1 回目の活動以外は、「ちび森」は別の教室で活動を行っている。これは、2 点理由がある。1 点目は、メイン活動の参加者への配慮である。90 分間子どもたちが、じっと座っているのは不可能である。途中で、騒いだり、走り回ったりする子どもも出てくる。その時、別の部屋で活動していれば、メイン活動の邪魔をすることはない。2 点目は、子どもたちへの配慮である。「ちび森」に参加していた子どもたちは、体を動かしたい子どもたちが多かった。その時、狭い部分しか使えないのでは、のびのびと活

動が出来ない。そこで、のびのびと活動できるように、別の部屋を使用することとした。
このように、「ちび森」は、回を重ねるごとに、少しずつ形を変えていった。

4. 実践内容

本節では、「ちび森」での実践内容について報告をする。「ちび森」での実践では、「ことば(日本語)を使って、他者とのつながりがつくる」ことを目指した。そこで、「自己紹介をする」、「自分の夢を書く」など、自分を表現し、お互いに表現し合うことによって、他者理解を進め、つながりを作ってもらおうとした。今までの年少実践での経験、反省を生かし、実践者として、子どもたちがこの活動の意味を理解しやすいように、明示的に目標などを示した。また、意味の分かっていない子がいれば、意味が分かるように丁寧に説明を行ったうえで活動を進めて行った。また、「わせだの森」の最後に、大人の教室へ行き、どんなことをしたか、大人たちに発表をするという目標を設定していたため、それに向けて努力するという姿勢が子どもたちから見えた。特に、印象に残った活動は、2回目の「自分の夢を書こう」の回と、3回目の「紙芝居をつくろう」の回である。

4.1. 実践例 1：自分の夢を書こう

この実践の目標は、自分の夢を書くことによって、自分のことを理解し、また、他の人の夢を理解する行為を通して、「つながりをつくる」というものであった。概要は、表3の通りである。

表3 ちびっ子わせだの森 2回目概要

日時	内容	目標	参加者
2012/06/02	<自分の夢について書こう>	自分の夢を書くことによって、	7名
15:00	①お互いの夢について話す	自分のことを理解する／他の	保育園児：5
16:30	※簡単な話から 何が好き？ どういうことするの好き？など ②色々な話が出たら、それを紙に書くことを提案する ③ワークシートを配布 ※記入するのは、文字でも絵でもなんでも大丈夫と伝える ※最後に壁に飾ることも伝える ④みんなに発表する	人の夢を理解する	名 小学生：2名

この回は、来ている子どもたちの年齢の幅も広く、活動を行うのが困難かと思っただが、初回の反省を生かし、その子どもの認知発達レベルと日本語能力にあった活動に出来るように活動に柔軟性を持たせた。それが、自分の夢を、絵でも文字でも良いので、表現するという事だった。この活動で重要なのは、文字を書くことではなく、ことばを使って、他者と「つながりをつくる」という事だったので、絵でも全く問題なかった。

この活動の一番良かった点は、子どもたちが他者との関わりの中で、ことばでつながる実感を得ることが出来たことだと筆者は考えている。特に、最後にメインの活動に参加していた大人たちの前で、自分の夢について話すという経験は子どもたちにとって、非常に大きな意味があった。当初、Bくんだけが発表をする予定であった。しかも、Bくんは当初、「恥ずかしい」「やりたくない」と言って、嫌々、大人たちの前に立った。そこで、メインファシリテーターであった筆者が後ろに立ち、子どもたちのことばを、繰り返し参加者に向けて話すということをした。すると、安心感からかBくんは最後まで、話すことが出来た。Bくんの話が終わると、教室は大きな拍手に包まれ、Bくんはとても嬉しそうに、にこにこしていた。そして、最終的に、「ちび森」に参加していた全員が「自分の夢」について、発表することが出来た。自分の話していることを大勢の人が聞いてくれて、また、さらに肯定的なフィードバックを得ることが出来たのは、子どもたちの自信につながったようである。「ちび森」だけで活動していた時、他の子どもたちとあまり話さなかったGくんは、「わせたの森」終了後、嬉しそうに語ってくれた。「日本語話すの本当に楽しかった。今までで一番。また、ぜひ来たい。」と語り、妹のHちゃんも横で頷いていた。さらに、大人たちからの肯定的なフィードバックを受けた子どもたちを、親たちも嬉しそうに見ていたのは印象的である。

この日の振り返りで、この発表に関して以下のように話された。

【参加者】 全体共有をしたのはよかったと思う、教室がひとつになったし。子どもが来たのも、ただ、隣で預かってもらってる子ども、じゃないんだな、と。

⇒大人の夢よりよかったよね。

(中略)

【実習生】 親御さんたちは、最後の発表のときに戻ってきて、それを見て来てよかったと思ってもらえたよう。ここの活動にも興味を持ってもらえたみたい。

(2012/06/02 振り返り議事録から一部抜粋)

このように、別の部屋にいて、活動していても、最後に発表の場を持つことが、「わせたの森」の一体感、また、親子の共有の時間にもつながっていると考えられる。さらに、振

り返りでは、このような話も出た。

【実習生】子どものも貼って、見られてよかった。⇒リンクさせてよかった。

【実習生】発表できてよかったね。

【参加者】帰って、親子で話もできる。⇒お母さんたちも嬉しそうに観ていたし。

⇒そばについて、小さい声を拾って、みんなに伝えてあげていたのはよかった。

⇒場がなごんで、一体感が生まれた。

※下線は筆者

(2012/06/02 振り返り議事録から一部抜粋)

今回の活動では、自分自身の夢について書いたものを、教室に展示するという活動が含まれていた。そのため、子どもたちのも同じように展示したのである。このことにより、さらに「ちび森」の活動とメインの活動の一体感が生まれ、さらに、親子の話題にもしやすという親子の「つながり」も作れたと考えている。

また、「ちび森」の活動に、一人、アイルランド出身の父親も一緒に参加していたが、父親自身も子どもと一緒に絵を書きながら、筆者や日研ボランティアと日本語で会話をし、楽しむことが出来ていた。子どもたちのみではなく、親子、大人たちとことばを使って繋がれた良い活動であった。

4.2. 実践例2：紙芝居を作ろう

実践例1のように考えていた通りに活動が進まない場合もあった。それは、3回目の「「ちび森」」の実践である。この日は、様々な年齢、子どもたちの好みに合わせて活動を組み立てられるように、活動案を3つ準備しておいた。活動案の概要については、表4に示す。

表4 第3回目ちびっ子わせだの森活動案

<活動案1>

◆紙芝居作り

※子どもたちが学習に参加できそうだったら

※役割分担が出来るので、年齢に幅があったとき

- ① 紙芝居を読む
- ② どんな感想を言う
- ③ 自分だったらどんな紙芝居が作りたいかを話し合う
- ④ 紙芝居を作成
- ⑤ 大人たちに発表(16:10~)

<活動案 2>

◆プチ音読大会

※子どもたちが体を動かしたいという感じだったら

- ①MF と S でデモをする(かなり簡単に)
- ②冊子の中から好きなお話を選ぶ
- ③どうやったらおもしろいかをみんなで話し合う
- ④練習をする
- ⑤大人たちに発表(16 : 10～)

<活動案 3>

◆絵本紹介

※絵本の方に興味を示したら。

- ① ある絵本の中から好きなものを選ぶ
- ② 絵本の読み聞かせ
- ③ なぜその本を選んだのか、どんなところが面白いのかを発表できるようにする
- ④ 大人たちに発表(16 : 10～)

【第3回ちびっ子もり タイムスケジュールより一部抜粋】

しかし、この日は活動案の通りにはほぼ行かなかった。なぜなら、参加者が2人しかいなかったためである。筆者は、人数が少ない場合は想定していなかった。そのため、日研生のボランティアが1名来てくれていたのにも関わらず、思っていたように活動が出来ず、「ちび森」ではなく、「わせだの森」のただの託児所のような形で終わってしまった。一応Aちゃんとは、お姫様の話の紙芝居を4枚程度一緒に作ることが出来たが、Bくんは置いてある本を少し読んでみたり、走ってみたりと終始、落ち着かない様子であった。また、AちゃんとBくんは、兄弟関係にある。3回目になると、子どもたちの関係性は把握できているので、関係性も視野に入れた活動に切り替えるべきであったと反省をした。子どもたちにとって「ちび森」という場で、何か活動を行うということに、意味を持たせることが出来ていなかった。

5. 考察

5.1. 筆者のちび森での変容

ちび森開始当初、筆者は1つの活動しか準備していなかった。そのため、臨機応変に子どもたちの年齢などに応じて、活動を行うことが出来なかった。しかし、実践、振り返りというサイクルの中で、いくつか活動を作ることや、ある程度、来ている子どもの幅に合わせて出来る活動を準備するようになった。

また、「ちび森」開始当初は、親と子ども、子どもと子どもの「つながり」しか意識できていなかった。それは、以下の「ちび森」を開始する前に目標としていたことから明らかである。

【再掲】

- ・親と子がことばを使ってともに学ぶ場を提供する。
- ・親同士の交流、子ども同士の交流の場を提供する。
- ・日本語(ことば)を使って自分のことを発信できる活動をデザインする。
- ・「日本語を使って何かをする＝楽しい」という気持ちになるような活動をデザインする。

(2012年4月30日提出 「わせだの森 デザイン案」より一部抜粋)

しかし、「ちび森」の活動を行っていく中で、「わせだの森」の参加者との「つながり」など、自分以外との他者とのやりとりの中で、子どもたちのことばを通じた「つながり」が強化されていくということに気が付いた。それは、「4.1 実践例1：自分の夢を書こう」で述べた「発表」の下りからである。そこから、筆者は「ちび森」での「つながり」ではなく、「わせ森」としての「つながり」を意識するようになった。この気付きは、筆者にメインの活動への連携の必要性を気付かせてくれた。

5.2. メインの活動との連携

ちび森の初回は、メインの活動との関連性を持たせなかった。しかし、そうすると「わせだの森」の中に、「ちび森」だけが別というような印象を受けた。「わせだの森」の最大の魅力は、様々な人と出会えることである。その他者と関わる機会を無くしてしまうのは、非常に「ちび森」参加者にも、メインの活動の参加者にとっても、もったいないと考えた。そのことから、2回目以降は、積極的に「ちび森」の活動も、メインの活動と関連性を持たせた。そして、メインの活動の終盤の時間に、共有の時間を設けた。このことが、わせだの森の参加者にも、ちび森の参加者にも、良い影響を与えていた。詳細は、「4.1 実践例1：自分の夢を書こう」で詳しく述べた。自分の話したこと、書いたものを誰かに伝え、それによって、自分が認められるというサイクルが子どもたちにとっても、親にとっても「わせだの森」に来てよかったと思える要因となっただろう。

6. おわりに

本稿では、筆者の「ちび森」を運営していく中での、変容を具体的な実践例から報告した。館岡(2012)は以下のように、ことばを学ぶ教室について述べている。

ことばを学ぶ教室とはどのような場なのか。ことばは人と人をつなぐものである。

したがって、ことばを学ぶということは、リストのようになっていることばを知識として覚えて身につけるということではなく、人と人がことばによってつながることを意識的に体験することであると考える。(pp.57-58)

つまり、ことばの教室はことばを学ぶ場ではなく、ことばを通して、つながっていく場なのである。まさに、「わせだの森」はそういった場であると、この実践を通して、筆者は感じた。今期のわせだの森のコンセプトである「つながり」とは何であったのか。「つながり」はとただ単純に、誰かと誰かが会話をしていたからつながったというような単純なものではない。その人が、ことばを使って自分を表現し、また、相手がことばを使って自分を表現したものを理解するという、相互理解によってこそ、「つながり」と言えるのだ。

今回の「ちび森」の実践を通して、子どもたちにどれだけの「つながり」を作ってもらえたかは、明らかに目に見えるものではないので、分からない。しかし、保育園や学校では出会えない大人たちと出会い、その大人たちと会話をし、自分の発表を聞いてもらい、さらに、認められるという経験は子どもたちにとって大きな自信となったはずだ。また、「人と人がことばによってつながることを意識的に体験すること」(館岡 2012)が出来たであろう。

今後は実習生としての、立場を離れて「わせだの森」と関わっていくことになると思うが、今後も「わせだの森」という場に関わっていけたらと思う。

7人で納得するまで、話し合い、実践をデザインし、実践し、振り返りをした日々は、学びの多い日々であった。「わせだの森」の実践で学んだことを必ず今後の自身の実践に生かしていこうと思う。

参考文献

- 池上摩希子 (2009). 「教室」の解体が創出するもの——「にほんご わせだの森」の実践から考える対話の可能性. 小林ミナ, 衣川隆生 (編) 『教室』(日本語教育の過去現在・未来 3) (pp. 161-179) 凡人社.
- 川上郁雄 (2011). 『「移動する子どもたち」のことばの教育学』くろしお出版.
- 館岡洋子 (2012). テキストを媒介とした学習コミュニティの生成——二重の対話の場としての教室『早稲田日本語教育実践研究』1, 57-70. <http://hdl.handle.net/2065/34125>
- 松本裕典, 角浜ひとみ (2012). 2012年度春学期「にほんご わせだの森」実践報告『地域日本語教育実践研究』7, 3-10. <http://www.gsjal.jp/ikegami/report07.html>

ウチハタ メグミ (修士課程 1年)

地域日本語教育実践研究
実践研究(1)報告集 2012 年度春学期
(通巻 7)

発行日 2012 年 10 月 31 日
発 行 早稲田大学大学院日本語教育研究科
〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-7-14
編集責任 池上 摩希子